Ⅱ. 教育・授業改善、FD

1. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を超えた教職員の交流を図る場にもなっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

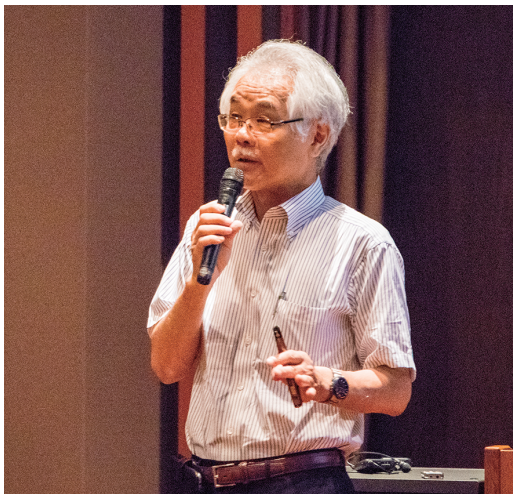
昨今、我が国の高等教育において、博士課程進学者の減少をはじめとする大学院離れの傾向、大学から大学院への接続（＝大大接続）や大学院から社会への接続（あるいは社会から大学院への接続）の改善が喫緊の課題となっています。そうした状況の中で、22回目にあたる今回のシンポジウムでは、「京都大学の大学院教育の今とこれから」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

2018年9月7日に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催され、参加者は207名でした。

（1）プログラム

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続けて、本学の自然科学分野および人文・社会科学分野の大学院から、5名の研究科長・部長・専攻長にご登壇いただき、各研究科等における大学院教育や大大接続に向けた取り組みについて、ご報告いただきました。

午後の部では、大学院教育の現状と課題について俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、大学院教育における新たな潮流として、プレFDプログラムやインターンシッププログラムなどについての4つの報告を共有した後、京都大学の大学院教育の未来について、執行部および企業等から6名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



基調講演1

テーマ1：モデレーター・報告者

(2)参加者の声

参加された教職員の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数72件、回収率31.2%)。興味深かったプログラムでは、基調講演2の「大学院教育をめぐる現状と課題」(40名)がもっとも多く挙げられ、テーマ1「本学の大学院教育改革:研究科等の取組」(39名)、基調講演1「京都大学の大学院・大大接続の現状と課題」(34名)と続きました(図1)。また興味深かった点に関する自由記述では、「組織改革、学部1年生の授業内研究室訪問の取り組みなど、やはり手厚く学生に対応せねばならんのだと思った」「挑戦的な未来に向けた教育改善の取り組みを各部局がすすめていることは勉強になった」「大学院および大学院教育の危機・存在そのもののあり方を問い、共有することができた」といった感想もあり、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(40.3%)、「カリキュラムの改革」(18.1%)、「教育方法(アクティブラーニング、PBLなど)」(18.1%)、「英語による授業」(15.3%)、「入試改革(新テスト、特色入試など)」(15.3%)などが多く挙げられており、京大と同様の研究大学における教育改革への関心が際だっていました。自由記述の中では、報告内容についてのクリティカルなコメントや、問題の指摘ではなくビジョンを示してほしいという意見も寄せられました。

これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

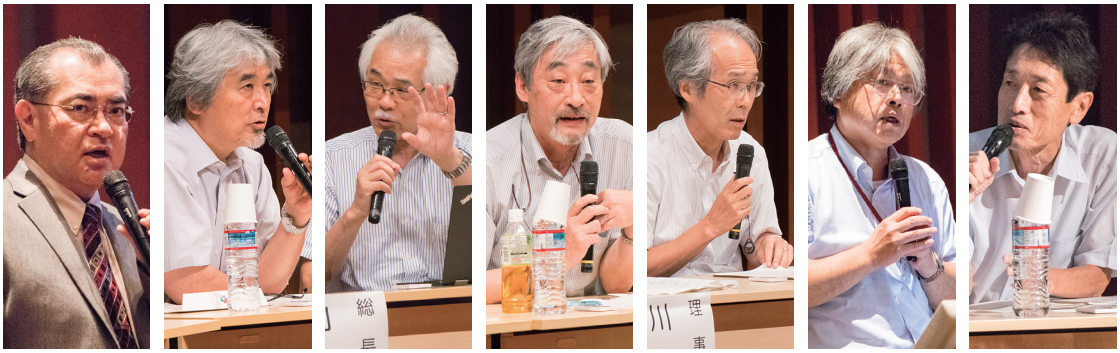
当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

- 全学教育シンポジウム:http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php

(松下 佳代・長沼 祥太郎)

基調講演2

テーマ2:モデレーター・報告者



テーマ3:モデレーター・パネリスト

全学教育シンポジウム　プログラム

司会進行：山田 剛史　高等教育研究開発推進センター准教授

【午前の部】	
10:00～	開会挨拶・基調講演 1：「京都大学の大学院・大大接続の現状と課題」 北野 正雄　教育担当理事・副学長
10:35～	テーマ1：報告・パネルディスカッション 「本学の大学院教育改革：研究科等の取組」 《モデレーター》松下 佳代　高等教育研究開発推進センター教授 《報告者・パネリスト》 足立 壯一　医学研究科人間健康科学系専攻長・教授 稲垣 恭子　教育学研究科長・教授 大嶋 正裕　副理事・工学研究科長・教授 高倉 喜信　薬学研究科前研究科長・教授 原　良憲　経営管理研究部長・教授
12:05～	（昼食・休憩）
【午後の部】	
13:00～	基調講演 2：「大学院教育をめぐる現状と課題」 山極 壽一　総長
13:35～	テーマ2：報告 「大学院教育・専門家教育の新たな潮流」 《モデレーター》田口 真奈　高等教育研究開発推進センター准教授 《報告者・パネリスト》 出口 康夫　戦略調整担当理事補・文学研究科教授 錦織　宏　医学研究科附属医学教育・国際化推進センター准教授 杉野目道紀　戦略調整・教育担当理事補・工学研究科教授 飯吉　透　教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授
15:10～	(休憩)
15:25～	テーマ3：パネルディスカッション 「大学院教育の未来」 《モデレーター》飯吉 透　教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授 《パネリスト》 山極 壽一　総長 北野 正雄　教育担当理事・副学長 川添 信介　学生担当理事・副学長 有賀 哲也　教育改革担当副学長・理学研究科教授 喜多　一　情報環境機構長・国際高等教育院教授 古藤　悟　三菱電機先端技術総合研究所技術顧問・(一社)産学協働イノベーション人材育成協議会理事
16:55～	閉会挨拶
17:00～	終了
17:15～	情報交換会　カフェ「Arte」

2.「3つのポリシー」勉強会

京都大学では現在、全学の教育制度委員会の下で、「3つのポリシー」の見直しが進められています。本センターは、教育推進・学生支援部教務企画課と連携して、この改革を支援しています。

(1)勉強会の開催

2018年12月26日、2019年1月15日の2回にわたって、「3つのポリシー」勉強会を開催しました。3ポリシーについては、2016年に策定・公表が義務化されたため、2016年度にも勉強会等を実施しましたが、そのときは学部が主で、大学院についてはアドミッション・ポリシーのみの見直しにとどまっていました。今回の見直しは、2019年度に受審する第3期認証評価を念頭においたものであり、学部・大学院(研究科、専門職大学院、リーディングプログラム)のすべてを対象としています。

すでに教育制度委員会から各部局に、「3つのポリシー等に関するチェックリスト」「各ポリシー見直しの視点」といった見直しのためのツールが提供されていたため、本センターでは、3ポリシーの考え方、認証評価との関係、見直しのポイントなどを、具体例にもとづいて説明するとともに、各部局の見直しを個別に支援することとしました。

第1回勉強会では、策定上の留意点についてセンターから説明した後、意見交換し、希望部局に対して相談会を行いました。第2回勉強会は、これまでのQ&Aを簡単に整理して示し、大半の時間を相談会にあてました。勉強会の参加者の多くは各部局の3ポリシー策定担当者で、参加者数は第1回が47名(20部局)、第2回が20名(11部局)でした。

主な相談内容としては以下のような点がありました。

- 学部・大学院の中には様々な専攻やプログラム等があるが、それをどう記載すればよいか。
- ディプロマ・ポリシーにおいて、社会的ニーズや学修目標をどう表現すればよいか。
- 3ポリシーは頻繁に変更できるものではないのである程度の抽象性をもたせた書き方になるが、一方で「明確かつ具体的」であることを求められる。その折り合いをどうつければよいか。

なお、いくつかの部局では、AP→CP→DPという順序で読み進めることを前提とした書き方がなされていますが、もともと3ポリシー設定の背景には学位の国際的通用性を高めるという要請があることから、DP→CP→APという順序でロジックを組み立てることが求められています。勉強会ではそのことを強調しました。

(2)個別コンサルテーション

勉強会以外に、要望のあった部局(農学部・農学研究科、教育学部・教育学研究科、薬学研究科、工学部・工学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、医学研究科社会健康医学系専攻、法学部・法学研究科:1月20日現在)に対しては、個別にコンサルテーションを行いました。

各部局から修正のうえ提出された3ポリシーは、教育制度委員会で検討され、2019年5月には公開されることになっています。

- 「3つのポリシー」勉強会
  http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/event-2/

(松下 佳代)

3. 新任教員教育セミナー

2018年9月19日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2018」を開催しました。本セミナーは、今年度が第9回となり、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています。

(1)プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1　2018年度京都大学新任教員教育セミナープログラム

13:00～	開会式　（司会：高等教育研究開発推進センター准教授　山田 剛史） 趣旨説明　高等教育研究開発推進センター准教授　山田 剛史
13:05～	セッション１　オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長（教育・情報・評価担当）北野 正雄
13:30～	セッション２　ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」文学研究科准教授　伊勢田 哲治
13:55～	セッション３　私の授業 理学研究科教授　沼田 英治
14:20～	セッション４　京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授　山田 剛史／田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション５　グループ別セッション（参加型セッション）（詳細は表２参照）
16:30～	休憩
16:50～	セッション６　インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 閉会挨拶　高等教育研究開発推進センター教授　松下　佳代

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事・副学長より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。大学を取り巻くマクロな状況を踏まえつつ、本学が取り組んでいる様々な教育改革について紹介がありました。特に、昨今話題になっている高大接続に関する取組について、新たに始まった特色入試も交えながら紹介されました。

セッション2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。高等教育機関全体にとって喫緊の対応課題となっている研究公正について、教育（授業）に埋め込む形で学生への研究公正を行うという先進的な取組が紹介されました。

セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、沼田英治理学研究科教授より授業実践の紹介がありました。沼田教授がコーディネーターを務める生物学のフロンティアをはじめ、これまでに実施してきた様々な授業を振り返って、「講義において重視していること」について紹介されました。

セッション4では、本センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。実際には冊子にまとめた『教育サポートリソース』、「センターウェブサイト」、ICT活用教育に関するポータルサイト「CONNECT」について配布・提示しました。

その後、セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました（表2）。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

表2　セッション5　参加型セッションの各テーマ

テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター（センター担当者）
京都大学の国際化をどのように進めるか	国際戦略本部特定講師 フェルナンド・パラシオ	本学では、一層の学術の発展と持続可能な地球社会の構築に貢献するために、国際化のための包括的な計画を提示する「国際化推進に関する基本コンセプト」を策定しました。本セミナーでは、このコンセプトを出発点に、京都大学の国際化を推進するためのベストプラクティスについて、参加者のみなさんとともに検討したいと思います。	SADEHVANDI研究員 河野研究員
研究室運営を考える	学際融合教育研究推進センター准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI（Principal Investigator）各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思います。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。	岡本特定助教
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム准教授 中川 純子	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	鈴木特定研究員
アクティブラーニング型授業をやってみよう	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代	今年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業（講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業）に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけつつあります。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験してもらいながら紹介します。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方まで参加できます。	川内研究員
ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に	高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈／酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセミナーにしたいと思います。	安宅特定研究員

(2)参加者

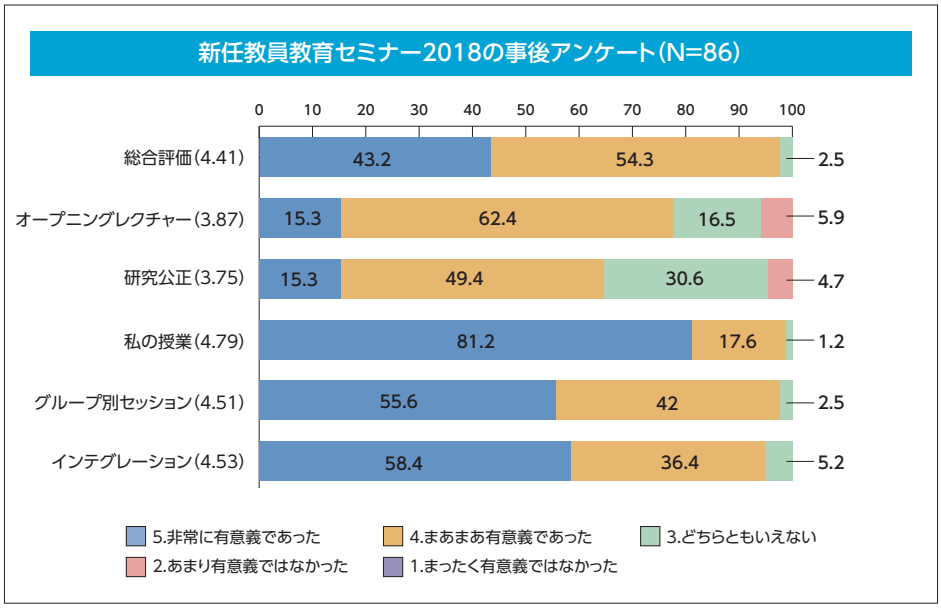
本セミナーは、教育目的に限定して設定されているため、受講対象となる新任教員を、「平成29年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は96名(教授7名、准教授30名、講師9名、助教50名)でした。

(3)参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、86名(全体の89.6%)から回答が得られました。

プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度は、5段階で4.41(「非常に有意義」から「まったく有意義でない」の5段階)と高い評価が得られました(下図参照)。また、個々のセッションについて見てみると、上位項目としては、私の授業(4.79)、インテグレーションセッション(4.53)、グループ別セッション(4.51)となっていました。



プログラム全体／グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの

（プログラム全体について）

- 私の授業をもう少し幅広いテーマでききたい。
- 時間的には難しいですが、他のセッションのお話を聞きますと、他も面白そうでしたので、参加（経験）できればよかった、とは思いました。
- 5-3は全員やっていい内容ではないかと思う。
- セッション5の時間を長くして、複数選ぶのも良いと思う。
- セッション5（5の3）、6の様な参加型プログラムは追加しても良いと思う。
- 人数は少ないかもしれませんが人文系の教員もいるので、できればもう少しそこに目を向けていただければと特に５のセッションで嬉しいです。
- 他分野の先生と普段の悩みを共有できる機会を増やして欲しい。
- 異分野の連携による教育・研究など、良い取り組みがあれば聞いてみたいと思いました。
- 学生を何らかの形で参加してもらえないでしょうか。学生側の生の声（本音）が知りたい。

（追加すると良いテーマについて）

- 今の学生の傾向や特徴などについてのレクチャー
- コミュニケーション研修やハラスメント研修（全体向）
- コーチング方法について
- 時間のマネジメント
- 京都大学の取組紹介　おもしろチャレンジとかアカデミックデイとか…
- 障害学生支援について
- 発達障害などをテーマにあげてほしい。
- 留学生支援、障害等多様な学生との関わり方
- 研究と教育のweight（バランス）について
- 研究室の運営に関わるお金のはなし
- 研究室における教員間（教授⇔准教授⇔助教）の付き合い方
- 国際化推進についての話は、もっと教育にかかわる形でするとよいと思いました。
- 女性キャリア、京大学生（学部卒）でない学生・会社員への授業について

本セミナーに参加して良かった点

参加して良かった点に関する自由記述には多くの感想をいただきました。全てを掲載することはできませんが、他分野の先生方との交流を好意的に捉えておられる先生が多かったです。他にも

- 普段は個人の研究成果の向上などに意識が向きがちですが、大学の一員としての意識が高まり、良いと思いました。
- 普段の業務では全く聞く事が出来ない様な話や意見をお聞きする事が出来ました。自分だけではなく研究室の他の人にも知っていただきたい内容でした。
- 自分の（研究室・学部）以外の授業の仕方、研究室運営のノウハウを学べたのが大変有意義でした。もし許されるのであれば、振り返りとして数年後にもう一度このようなセミナーに参加したいです。
- グループワーク等で多くの先生方とお話できる機会を持てたのが有意義でした。各セッションの内容も大変為になるものばかりでした。

といった感想が寄せられました。

こうした意見を参考に、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。

（山田 剛史）

4. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になろうとする大学院生やオーバードクター（OD）・ポスドク（PD）のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する、4つのプレFDの取組についてご紹介いたします。

（1）文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

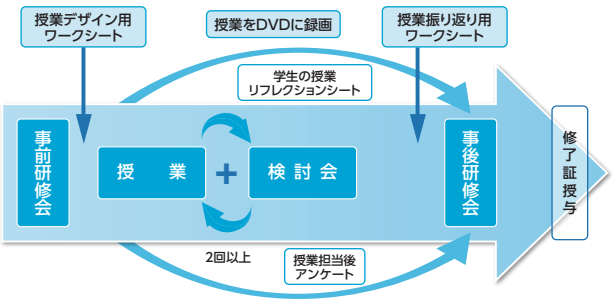
本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2回以上の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約150名が修了証を得ています。

2018年度は、文学研究科よりコーディネーター6名、教務補佐員5名、講師24名が参加し、本センターより5名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

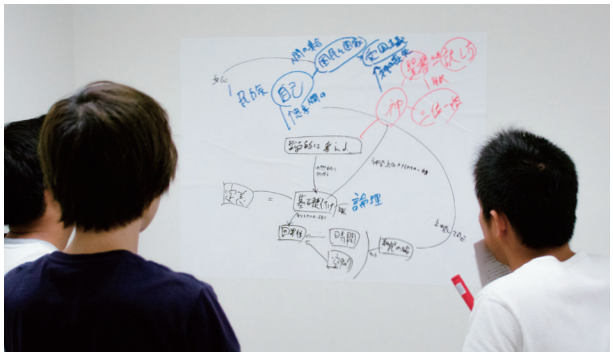
本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、下記のHPをご覧ください。

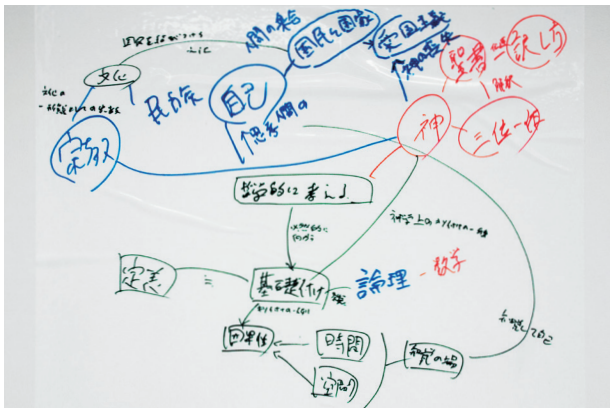
- 文学研究科プレFDプロジェクト
  http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/

（鈴木 健雄・田口 真奈）



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ





(2)大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、京都大学大学院文学研究科が提供する単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」が開講されました。本授業は、2015年度～2017年度まで開講された「人文学入門」を継続、発展させたものであり、特色ある科目として「プラザ推奨科目」に認定されています。受講生は、京都大学の学生を含め、様々な大学から集まっています。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

2018年度の開講テーマは「『エラそう』なものを疑おう！ 社会の不合理を考える異分野コミュニケーション」でした。コーディネーター1名のもと、倫理学や心理学、宗教学、社会学、言語哲学といった様々な専門分野出身の若手講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。一方的な知識伝達だけでなく、受講生間のディスカッションを促す工夫が凝らされた本講義を通じて、受講生は、社会的規範や「当たり前」とされるもの、権威づけられた対象や制度をいかに疑い、疑った先にどんな新しい認識が得られるのかについて理解を深めました。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦した本授業に対して、受講生からは、「普段見逃していた矛盾点（エラそうなもの）に気付けました。グループワークで先生を交えつつ議論し、深く探究できたので良い経験になりました」「先生も一緒になって悩んでくれて嬉しく、先生や生徒との距離が近い授業で充実していました。いろんな先生が私たちに一生懸命に何かを伝えようとしてくれているのが伝わってきました」「あまり勉強は好きではないのですが、最終的に、意欲的になれるキッカケをくれました」などの感想がありました。ここからは、プレFD修了生たちの授業が、内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

- 文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」
  http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/

（鈴木 健雄・田口 真奈）

(3)大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会と本センターが共催し、将来、大学教育に携わることを希望する京都大学の大学院生(PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で14回目となります。2018年度は、8月21日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。様々な専門分野から32名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか?」に対する考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

終了直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない〜 5: 非常に満足している)で受講生に評価してもらったところ、満足度の平均が4.7点と、非常に高い満足度でした。また、今回初めて、各分科会のまとめをポスター発表の形式で行ったのですが、その評価も4.7と好評でした。このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「大学教育を目指す大学院生は、研究能力については常に考えるにもかかわらず、大学教育について考える機会がないのは問題だと考えていたので、とてもよいと考えます」など、このような講座の必要性を認め、評価する感想が数多く見られました。

● 大学院生のための教育実践講座
http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html

(松下 佳代・長沼 祥太郎)

プログラム	
10:00~	開会式 挨拶:北野 正雄 理事・副学長
10:20~	セッション 1 ミニ講義 1 「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」: 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
10:45~	セッション 2 グループ討論 1: 「アクティブラーニング」「ICT 活用」「多様性」「授業デザイン」の 4 つの部会に分かれて議論
11:45~	セッション 3 ランチと自由討論
13:00~	セッション 4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」: 蓮 行 劇団衛星主宰
14:20~	セッション 5 ミニ講義 2 「私の授業実践」: 斎藤 有吾 藍野大学助教
15:05~	セッション 6 グループ討論 2: 「アクティブラーニング」「ICT 活用」「多様性」「授業デザイン」の 4 つの部会に分かれて、さらに深く議論
16:05~	グループ討論整理
16:40~	セッション 7 全体討論:ポスター形式で 4 部会から 7 グループのポスターを掲示し、 活発な議論を展開
17:40~	ラップアップ
17:55~	閉会式 挨拶・修了証授与: 飯吉 透 FD 研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交換会(〜18:30)

(4)大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

(1)大学教育の現状を知り、理解すること
(2)授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
(3)効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
(4)多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
(5)模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
(6)グループでの協同作業に積極的に関わること
(7)自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2018年度は2月6日・7日・8日の3日間で実施されました。受講生は12名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(医学研究科2名、人間・環境学研究科3名、経営管理大学院4名、公共政策大学院1名、教育学研究科2名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(12名中11名から回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均4.0)」、「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.9)」、「自分の将来に役立つ内容だった(3.9)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(4.0)」(いずれも4段階評定)など高い評価が得られました。自由記述からは、「全ての内容について配慮がされており、楽しい授業で自ら学びたいと感じる仕組みが大変良かったです」、「アクティブラーニングについて、アクティブラーニングで学ぶ、という入れ子形式になっていたことで、能動的に学ぶ、という新しい学習の仕方を体感できたように思います」、「授業は『大学で教えること』とされているが、経営管理の社会人学生にとっても身につけたほうがいいスキルや考え方が多かったと考える」、「今後大学で教えることがあった場合、このプログラムを受ける前よりも多角的な点から考えて授業を行えると思います」、「本講義は全体を通して『実践で使える知識』が非常に多く、将来何かしらの講師を目指す学生にとっては有用性の高い内容であったと感じています」といった様々な声が聞かれました。

(山田 剛史)

5. 他部局との連携

(1)医学教育・国際化推進センターとの連携

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」(https://www.k3kyoto.jp/fcme/)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようになることを目標としています。毎年、全国から10名程度の医師が参加し、年3回の参加体験型学習(3泊4日)、および月2回のWeb討論型学習(1回2時間)を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学をもち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。本センターからは、必修科目の1つである「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊す―自由な学びの場の構築」に、松下佳代教授が講師の一人として参加しています。また、LMSとしてPandAも大いに活用されています。

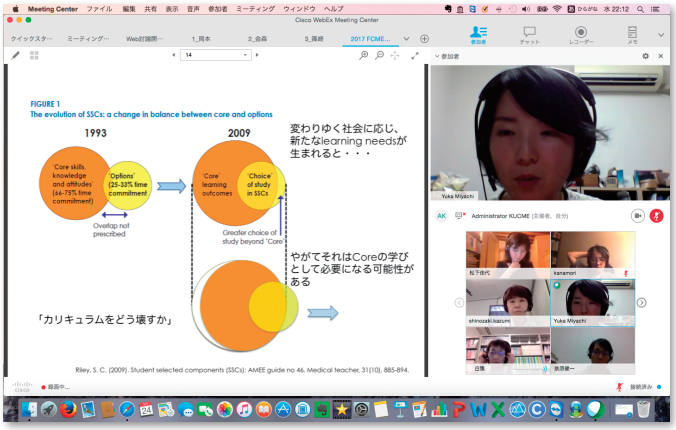
FCMEについては、今年度の全学教育シンポジウムのテーマ2「大学院教育・専門家教育の新たな潮流」の中で、プログラム責任者の錦織宏准教授が報告されました。また、この3年間の実績をもとに、現在、『現場で働く指導医のための医学教育学―基礎編(仮題)』が編まれており、近く刊行予定です。社会人の学び直しが、大学・大学院教育の大きな課題になっている現在、国内外で勤務する医師を対象に、Web授業と経験学習を組み合わせた密度の濃いプログラムを実現した例として、とても参考になる取り組みです。

なお、医学教育・国際化推進センターとは、教育アセスメントについても連携していますが、そちらについては、「IV. 教育アセスメント」をご参照ください。

(松下 佳代)

2018年度版ハンドブック

(http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/handbook.pdf)



Web討論型授業の1コマ

(2)薬学部との連携

①授業改善の支援

2018年度より、本センターは、京都大学薬学部における授業改善の支援に取り組んでいます。具体的には、今年度よりリニューアル開講となった、アクティブラーニングを取り入れた薬学部初年次科目「薬学研究SGD演習」(SGDはSmall Group Discussionの略)の授業に参与し、担当者にフィードバックを行う形で、実践的なFDに取り組んでいます。例えば、本センターからの提案により、授業の後半において、これまでの授業内容の振り返りを行う回が取り入れられました。また、次年度に向けて、授業の一部の「研究室訪問」をより有意義なものにするための提案もなされました。

授業の様子や、担当教員へのインタビューは下記からご覧になれます。

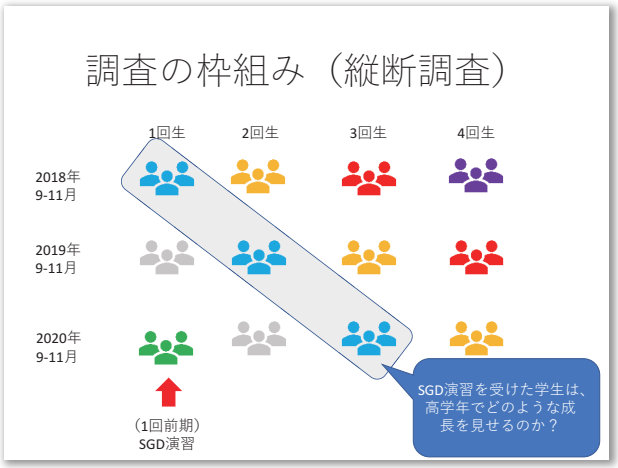
薬学部初年次科目「薬学研究SGD演習」授業レポート:http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/sdg/

担当教員へのインタビュー:http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-794/

②学生の学習・生活実態調査の支援

上記の授業改善の支援と関連して、学生の学習や生活の実態に関する調査・分析を本センターが主体となって進めています。調査では、京都大学薬学部の学生が普段どのように学習を行っているのかといった学習の側面から、研究マインド、教員との親密感や所属意識などまで、大学生の学習において近年重要視される幅広い指標を用いています。こうした結果を薬学部の教員・学生と共有することで、単なる分析に終始するのではなく、より効果的な教育・学習改善へと活かしていくことが期待されています。

(松下 佳代・長沼 祥太郎)



(3)宇宙総合学研究ユニットとの連携

本センターと学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットとの連携は2016年度に始まりましたが、2018年9月からは3名の教員(飯吉透教授、松下佳代教授、田口真奈准教授)が宇宙総合学研究ユニットの併任教員に加わり、さらに連携を強めています。今年度は下記の活動を実施し、その成果報告は、2019年2月9・10日に開催された第12回宇宙ユニットシンポジウム「人類は宇宙社会をつくれるか?―宇宙教育を通じた挑戦―」にて行われました。

①有人宇宙教育プログラムへの協力

宇宙総合学研究ユニットでは、宇宙飛行士の土井隆雄特定教授を中心として、「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2016～2018年度)の取組が進められています。このプログラムの目的は、宇宙に関わる高い専門性を持つ次世代人材の育成と潜在的な宇宙利用の拡大の両面に貢献することであり、全学共通科目「宇宙総合学」、ILASセミナー「有人宇宙学実習」、大学院横断教育科目群「有人宇宙学」が開講されています。

本センターは、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。特に「宇宙総合学」と「有人宇宙学」については、授業評価として学生に対するフォーカスグループインタビューやアンケートの実施、また学習活動・学習評価としてコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。

②パラボリックフライトを用いた微小重力環境における時空間認知を分析する研究教育活動

本活動は、宇宙総合学研究ユニット、霊長類研究所などとの連携による「パラボリックフライトを用いた微小重力下における社会的認知・認知進化に関する研究教育活動」(2017年度総長裁量経費)を継続して実施するもので、2018年10月6日、12月8日にパラボリックフライトが行われました。パラボリックフライトとは、航空機を放物線状に飛行させることで微小重力を体験できるもので、本活動は、このような重力環境の変化が、時空間認知能力や宇宙観・宇宙への関心などにどんな影響を与えるかを研究しています。

(田口 真奈・松下 佳代)

パラボリックフライトの様子

宇宙総合学の授業の様子

6. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト

京都大学高等教育研究開発推進センターのウェブサイトが2017年度に完了し、今年度から本格的に始導しました。当サイトのクリエイティブコンセプトを「RE：EDit（リエディ）」とし、編集を軸にした情報発信、メディアのようなサイトを目指しています。

当ウェブサイトの特徴としては、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考え、

①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計

②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築すること

が挙げられます。日本語サイトと同様の英語サイトも公開しており、京都大学の教員だけでなく、国内外の教育関係者にも広く見てもらうことができるようにしております。

実際に今年度4月末から12月までの閲覧状況は下記の図の通りです。アメリカやフランスなど海外からの閲覧者も一定存在していることがわかります。よく閲覧されているページとしては、コースデザインやカリキュラムデザインなどが挙げられます。参照元メディアとしては、グーグルやヤフーといった検索エンジンを使用していることがわかりました。

日本語版　https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/　英語版は末尾に/en/

ウェブサイト閲覧数	
日本	15,261
アメリカ	451
フランス	246
中国	114
イギリス	102
韓国	97
イエメン	70
ロシア	62
台湾	48
イタリア	42

今後も京都大学の教員のみなさんが、オリジナルの教育手法について考える上でのきっかけとなるような情報を発信したり、また授業構成を考えるヒントを探す上で有益なベテラン教員のインタビュー記事を掲載したり、現代日本の高等教育について考えるフォーラム等の情報が見えるようなサイトとして、活用していただけるよう、アップデートしていく予定です。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

（山田 剛史・岡本 雅子・川内 亜希子）